

# 浦幌町郷土博物館の資料と分類基準について

後藤秀彦

浦幌町郷土博物館は、昭和44年6月1日開館以来数多くの館資料を収蔵してきた。博物館開館に際しては、浦幌町の開基70年記念ということもあり、全町的な盛り上がりの中で特に開拓記念物を中心に資料が収集され、更に昭和42年、同45年に発掘調査の実施された平和遺跡（浦幌町字平和85番地）の一括資料その他が収蔵されるによんで、浦幌町郷土博物館の中心的なデパートメントとしてその位置を占め、館自体の特色として異彩をはなつようになり現在に至っている。

しかしながら、所蔵目録の整備及びそれに伴なう分類、更に研究・調査に至ってはその作業は著しく遅れ、着手されたのは極く最近のことであり、この作業はまだ数ヶ月の月日を要して一応の完了をみる作業である。

## 1

現行の資料分類基準は、昭和47年1月25日に決定された。これによる分類部門は次の7部門である。

- |     |        |
|-----|--------|
| ○考古 | ○開拓記念物 |
| ○民族 | ○民俗    |
| ○産業 | ○自然科学  |
| ○郷土 |        |

本館の所蔵資料を概観すると、考古・開拓記念物・郷土の各部門が多数を占め、他部門については、前記した三部門ほどの資料はない。

資料目録作成にあたり、大規模博物館が用いているアラビア数字による系統的分類も考えてみたが、地方自治体設立の小規模博物館でもあり、一応地元資料の収集・展示・保管・研究を目的としているので、現有資料の概要から六つの部門に分け、更にどの部門にも組み込めない資料及び地元浦幌の歴史・推移とは直接関連のない資料（近世資料、第二次世界大戦資料等）を「郷土資料」として包括していくことにした。更に「教育関係」資料についてもこの部門に統括した。

また、郷土資料および他の六部門についての分

類基準の概要は次のとおりである。

### ○考古

一般に「埋蔵文化財」と呼称されている土中より発見される物をいう。資料の時代区分は、旧石器・繩文（早・前・中・後・晚）・続繩文・擦文・オホツク・歴史の各時期に分期し、登録については、原則として調査毎（表採・試掘・発掘調査・寄贈・委託等）に登録していくこととし、資料目録には、町教育委員会事務局に備えてある『浦幌町遺跡台帳』のNo.を入れ相互の関連を密にするように努力した。

### ○開拓記念物

明治16年西田小次郎氏が浦幌町内に入植定住して以来、特に農業および一般生活に利用した文物を中心に林業・商業・運搬（交通）に利用した資料等を開拓記念物とする。但し、教育関係は除外して「郷土資料」に含める。

### ○民族

主としてアイヌ民族によって形成、使用された物をいう。

### ○民俗

北海道の場合、一般に「民俗」と呼べる資料に乏しいが、本館では「冠婚葬祭」に関する儀礼的な資料を民俗（Folklore）として扱い根本的にEthnologyとは異なる物を指して「民俗」として分類、収蔵する。

### ○産業

現行している農業・林業・水産業・商業・鉱工業、その他の部門に分けて収蔵する。農業等第一次産業については、開拓記念物を含めない。

### ○自然科学

生物・地学部門を主体とする。生物については、目・科・種の分類と和名・英名・学名を記載し、地学についても準用し不足事項については摘要欄その他で補足する。

### ○郷土

以上の六部門に含まれない資料及び教育・近世

・近代戦争に関する資料を包括し、美術的・芸術的価値のある物をも含める。

以上が本館における資料分類の大よその内容である。

## 2

1で、浦幌町郷土博物館における所蔵資料の分類基準の概要を述べてきた。本館における資料の偏向性は否めない事実である。このことは、各部門内においても同様の事実があり、このことの克服と更なる豊富化が今後の課題である。実際に個々の資料にあたって、その内容性を検討してみるとこのことは一層明確となる。例えば、「考古」を例にとってみると、旧石器時代の資料は皆無、縄文早期の資料が大多数を占め、続縄文は少々、擦文、オホーツクも少々という内訳である。擦文文化期の資料については、十勝太古川遺跡、十勝太若月遺跡の一括資料が収蔵される予定であるので資料は増加するであろうが、旧石器時代の資料については今のところ見通しがない。

縄文早期の遺物が多いのは、本町の地域性によるものである。吉野台地上に位置する各種の縄文早期遺跡がそれを物語っている。更に吉野台地から東側に浦幌川をはさんで位置する台地上に位置する生剛遺跡等の舌状台地の先端部附近のものである。

もちろん、それ以降に位置付けられる各時期の遺跡がないわけではないが、全道的にその絶対数が少ないとと思われる前期の遺跡は極めて乏しいが、中期の遺跡は幾千世・常室地区等の内陸の比較的標高の高い地点に認められるし、後～晩期の遺跡については、瀬多来地区や十勝太地区に認められる。現在までの調査では、幾千世・常室・瀬多来等の諸遺跡は単純遺跡の可能性がある。これらの遺跡の正式発掘調査の計画はないが、本博物館にとって今後良好な資料を供出する遺跡として注目してよいであろう。

博物館園事業の一環として、こうした遺跡の発掘調査を手がけることも近い将来にはあるかもしれない。

(浦幌町郷土博物館)

## 浦幌町の発掘調査された遺跡

後藤秀彦

### 1

北海道十勝郡浦幌町一帯は、先史時代遺跡の多いことで著名である。殊に、その年代が縄文早期に集中しており、その量も豊富で学界の注目するところでもある。これらの遺跡は主として、吉野～共栄～生剛の地区に多く見ることができるが、また時代の下降した時期に位置付けられる擦文時代の遺跡については、十勝太から昆布刈石にかけての海岸線の小高い丘の上に聚落跡として密集して存在している。

ここで述べる浦幌町の発掘調査された遺跡は、前記した縄文早期と擦文文化期のものが全てであり、とりあげる遺跡は次のとおりである。

1. 浦幌新吉野台細石器遺跡 昭和25年

名取武光・齊藤米太郎

2. 下頃辺遺跡 昭和34年

泉 靖一・河野広道・吉崎昌一

3. 十勝太遺跡 昭和40年

渡辺 仁

4. 平和遺跡 昭和42年 45年

大場利夫・堀野 昭・重松和男・明石博志

5. 吉野遺跡 昭和46年

大場利夫・堀野 昭・後藤秀彦

### 2

浦幌新吉野台細石器遺跡は、故齊藤米太郎氏によって発見された。<sup>①</sup>即ち、齊藤氏は小学校で教鞭をとりながら郷土史編纂のため、浦幌村シタコロベ（現：吉野、共栄付近）の調査を昭和9年春頃から実施した。この一連の調査の中で、齊藤氏は特殊な櫛目文尖底土器に細石器の伴出する遺跡の